

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：35314

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02469

研究課題名（和文）国際的学際的方法による社会情動的スキルを核とする幼小を繋ぐ非認知能力の評価法開発

研究課題名（英文）Development of an Evaluation Method for Non-cognitive Abilities Which Enable Children to Transition from Preschool to Primary School

研究代表者

大橋 節子（大橋節子）（ohashi, sestuko）

環太平洋大学・次世代教育学部・教授

研究者番号：80713073

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では幼児から小学校低学年をつなぐ非認知能力の評価方法開発をめざした。そのためにニュージーランド及びアメリカ合衆国における非認知能力育成論を分析し三点を明らかにした。幼児から小学校低学年は、計画的な非認知能力育成のスタート期として、Respect（尊重）、Responsibility（責任）、Resilience（折れない心）の非認知能力3Rsの育成を目標とする。保育者及び教員は非認知能力3Rsを遊び、環境構成、授業構成、クラスづくりの柱（ストランド）とする。その評価はニュージーランド保育指針「テ・ファアリキ」の「ラーニング・ストーリー」による質的評価とカンファレンスによって行う。

研究成果の学術的意義や社会的意義

分析研究としての意義：本研究では、ニュージーランド保育指針「テ・ファアリキ」2017年改訂の英語版を詳細に分析し、保育計画、保育実践、保育評価の論理をトータルに明らかにした。さらにニュージーランド保育関係者への調査も実施した。

開発研究としての意義：本研究では、上記の分析研究に基づき幼小接続期の非認知能力育成の目標論それに対する評価方法論を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of the study is to develop a method of evaluating non-cognitive abilities of preschoolers and children in the early years of primary school. To that end, we analyzed theories in New Zealand and the United States on non-cognitive development and identified three factors: aim, pillars(strands) and assessment. Assuming that the time between preschool years to the early years of primary school is a period in which intentional nurturing of non-cognitive abilities start, the aim during this period would be to develop three non-cognitive abilities: Respect, Responsibility and Resilience (the three Rs). Early childhood educators and primary school teachers can structure play, environment, lessons and classes around the pillars (strands) of the three Rs. The achievement of the three Rs is assessed by qualitative evaluation and conferencing based on the Learning Stories used in the context of the theories in Te Whariki, the early childhood curriculum document in New Zealand.

研究分野：子ども学

キーワード：非認知能力評価法 テ・ファアリキ Respect（尊重） Responsibility（責任） Resilience（折れない心） 非認知能力3Rs 幼小接続 幼児教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した2018年には、非認知能力の重要性が子ども学・幼児教育学・保育学研究において急速に注目を集めていた。しかし、①非認知能力の捉え方自体が曖昧かつ広範であり、定義と内容が定まっていない、②そのために非認知能力育成の論理が不明確である、③さらに現場の保育者が活用可能な非認知能力「評価法」の開発が遅れているといった課題が存在した。

さらに非認知能力の育成にとって重要な時期とされる幼児期と、教科教育を中心とする認知能力の計画的な育成がはじまる小学校低学年をスムーズにつなぐための「評価法」の論理解明も緊急課題であった。

2. 研究の目的

本研究では、幼児期から小学校低学年の子どもたちを対象に非認知能力の内実を明確にし、その評価法の開発をめざした。その手がかりとして(1)幼児教育の質的な記述法が先進的なニュージーランドのテファリキの子ども観察法と(2)ルーブリックによる社会情動的スキルの評価法が先進的な米国のキャラクター・エデュケーションの理論研究をめざした。それを踏まえて(3)社会情動的スキルを中核とする「評価法」の開発研究を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の学術的独自性は、幼児教育学と教科教育学が協働する学際的な「子ども学アプローチ」と、諸外国の先進事例の理論研究を行う「国際的な分析対象」を融合する研究方法論にある。幼児教育学では、方向目標のもとで展開される子どもたちの偶発的な活動や保育者と子どもの相互作用を忠実にみとる方法論が確立されている。それに対して、教科教育学では、到達目標のもとで展開される教授・学習過程の組織化や目標に応じた評価の論理が明らかにされている。さらに子ども学では、幼稚園や小学校といった学校種による年齢区分を超えた分析対象を設定する、学際的な研究知見や方法論も蓄積されている。

本研究では幼児教育学アプローチとして上田敏丈(名古屋市立大学)が、ニュージーランドのテ・ファリーキをはじめとする先進的な子どもの観察法、保育の評価法を先行研究も踏まえて分析と再整理を行い「質的な記述による社会的情動スキルの評価法」を検討した。同時に教科教育学アプローチとして中原朋生(環太平洋大学)が、米国のキャラクター・エデュケーションにおける Respect (尊重)、Responsibility (責任) といった社会情動的スキルに関連の深い学習領域の目標論、指導計画、評価法を先行研究も踏まえて分析し再整理を行った。両者の理論研究によって、明らかになった「質的な子どもの観察法・保育評価法」を手がかりに、研究代表者の大橋節子(環太平洋大学)がリーダーとなり、我が国の幼稚園及び小学校において使用可能な社会情動的スキルの評価法試案を開発した。

4. 研究成果

(1) 分析研究の成果

①ニュージーランド保育指針「テ・ファリーキ」2017年版の分析

本研究では、「テ・ファリーキ」における非認知能力形成の論理の解明を中心に進めた。1996年に初版が作成された「テ・ファリーキ」は、2017年に初めての改訂を行った。改訂においては、4つの原理と5つの要素というカリキュラム・フレームに変更がなかった。そのため本研究において、インタビュー調査を行ったニュージーランド保育関係者の多くが改訂というよりも「リフレッシュ」したという感想を述べていた。しかし、この「リフレッシュ」の中に、非認知能力とされる Resilience (折れない心) の育成、認知能力育成の基礎となる Disposition (学びに向かう構え) の育成、乳幼児と小学校のカリキュラムを接続す

る具体的な対応関係など、本研究に示唆を与える重要な改訂点が存在した。さらに、1996年版から継続された保育アセスメント法である「ラーニング・ストーリー」の運用についても、ニュージーランド現地の保育施設の実態調査を行い、非認知能力を含めた学びの物語を紡いでいく質的な評価法の実態を明らかにした。

②アメリカ合衆国におけるキャラクター・エデュケーションの分析

本研究では、アメリカ合衆国ユタ州において活躍した小学校教諭バーバラ・ルイス (Barbara A. Lewis) が開発した小学校低学年向けにキャラクター・エデュケーション教材における目標論と評価論の分析を進めた。まず目標論としては、最も包括的な能力として、Respect (尊重)、Responsibility (責任) の重要性が明らかになった。Respect (尊重) は、民主主義社会の基本原則である「個人の尊重」につながるとともに、自己効力感、自己肯定感、他者尊重などにも通底する包括的な能力であった。また Responsibility (責任) は、民主主義社会における権利主体としての責務をさす場合もあれば、ギリガンが主張する配慮と応答性など人間的な関わりの基礎にも関わる包括的な概念であった。さらに、Respect (尊重)、Responsibility (責任) を目標に掲げた場合、目標と密接に関わり評価を展開することも明確になった。つまり、目標として掲げられた身につけるべき能力の育成の Step (段階) が、そのまま評価基準となっていた。そして、教師と子どもがその Step (段階) を共有することが有効であり、それに基づいてルーブリックを作成することが重要であった。

(2) 開発研究の成果

①非認知能力 3Rs の目標

上述した分析研究の成果から、幼児から小学校低学年は、計画的な非認知能力育成のスタート期として、Respect (尊重)、Responsibility (責任)、Resilience (折れない心) の包括的な非認知能力 3Rs の育成を目標とする。保育者及び小学校教員は、非認知能力 3Rs を遊び、環境構成、授業構成、クラスづくりの柱 (ストランド) とする。

さらに、本研究では非認知能力 3Rs のサブカテゴリーを検討した。その結果、Respect (尊重) には他者理解・思いやり・自己肯定、Responsibility (責任) には発信・自律・行動、Resilience (折れない心) には安定性・自己強化・逆境克服というように、1つの R に3つのサブカテゴリーを開発した。

②非認知能力 3Rs の評価

非認知能力 3Rs の評価は、ニュージーランド保育指針「テ・ファーリキ」の論理を応用した「ラーニング・ストーリー」による質的評価とカンファレンスによって行う。「ラーニング・ストーリー」は、子どもたちが主体的に選択した遊び、仲間、場所における活動を写真撮影し、その学びの物語を紡いで行く質的な評価法である。さらに「ラーニング・ストーリー」は、子ども、保護者、保育者が三位一体となって物語を構成するものである。本研究では、Respect (尊重)、Responsibility (責任)、Resilience (折れない心) の視点から、「ラーニング・ストーリー」を作成し、子ども、保護者、保育者が三位一体となって、非認知能力 3Rs が伸びていく過程を記録する評価シートを開発した。さらに、その評価シートを用いて、保育者、教員、保護者が展開するカンファレンスの方法論を開発した。

③今後の課題

多様な育ちを保障すべき幼小期において、非認知能力 3Rs である Respect (尊重)、Responsibility (責任)、Resilience (折れない心) を育成する Step (段階) 論を明確にすべきか否か議論が分かれるところである。本研究の今後の課題として、「ラーニング・ストーリー」を基礎とする質的な評価シートとそれに基づくカンファレンスを試行的に実践し、緩やかな非認知能力 3Rs 育成の Step (段階) を構築していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大橋節子・内田伸子・上田敏丈・中原朋生	4. 巻 16
2. 論文標題 ニュージーランド保育関係者は2017年テ・ファリキ改訂をどのように捉えたか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 チャイルドサイエンス	6. 最初と最後の頁 41 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 上田 敏丈
2. 発表標題 保育行為スタイルの視点による保育者の専門性発達
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 入江礼子・小原敏郎編、上田敏丈ほか著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 萌文書林	5. 総ページ数 230
3. 書名 子ども理解の理論及び方法—ドキュメンテーション（記録）を活用した保育—	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究では、ニュージーランド保育指針「テ・ファーリキ」の分析過程において、国際大学IPUNZのセッティングにより2020年8月にニュージーランド教育省とのZOOM会議を行い、解釈の方向性の確認する機会に恵まれた。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中原 朋生 (NAKAHARA Tomoo) (30413511)	環太平洋大学・次世代教育学部・教授 (35314)	
研究分担者	上田 敏丈 (UEDA Harutomo) (60353166)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授 (23903)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ニュージーランド	国際大学 IPU New Zealand	Early childhood New Zealand	